



特集
職人という
生き方

一昔前までは身近だった職人という仕事。長い歴史の中で親方から弟子たちへ引き継がれてきた技術が、今や消失の危機にさらされている。今回の特集では、その技術を次の時代に残そうとする職人たちに光を当てる。

西那須野地区の職人が集う職工組合。その歴史は古く、設立は戦前までさかのぼるといふ。記録が残っている昭和50年頃には100人近い職人がいたが、年々減少し現在は20人ほど。組合長を務める薄井氏に話を聞いた。

——このままでは技術が失われてしまう危機感はある——

職人の世界にも押し寄せる変化の波

今から36年前の昭和55年。大工だった父の後を追って、この世界に足を踏み入れました。当時は周りに職人さんもたくさんいて、組合の集まりもとても活気があったものです。その頃から比べると少し寂しい気はします。

当時は“他人の飯を食う”という習わしがあったので、実家で働くのではなく他の親方のもとで住み込み修行。最初は右も左も全く分からず、言われたことも何1つ上手くできません。一人前になるには、少なくとも10年はかかるといいます。30年以上、この仕事を続けていますが、今でも自分の腕に納得することはありません。日々修行の毎日です。

今では大工の仕事も機械化が進み、鉋がけも機械で出来る時代になっています。しかし、まだ機械は職人の腕には及びません。そこには、数字では決して表せない、感覚の世界があるのです。手で鉋をかけた木の表面には不思議と艶が宿ります。それは長い時間をかけて体で覚えてきたもの。親方から弟子へ代々受け継がれてきた技なのです。

しかし、今は職人の数が減り、後継者不足が問題となっています。現に私にも後継者はいません。それでも、これまで培った技術を次に引き継げればという思いは今でも持っています。



薄井 正美さん Masami Usui
西那須野職工組合長
(薄井建築 代表)



那須野巻狩まつり



大将鍋出陣式



台風21号による大雨の影響で、1日のみの開催となった那須野巻狩まつり。10月21日に那須塩原駅西口駅前広場で開催された大将鍋出陣式は、断続的に雨が降り注ぐあいにくの天候にもかかわらず多くの家族連れで賑わいました。イベントのスタートを飾った大原間小のよさこいソーランや東那須野中の合唱、地元の小・中学生によるお囃子など、多くの子どもたちが日ごろの練習の成果を披露。空の雨雲を吹き飛ばすくらいに元気いっぱいな姿が、見ている観客を楽しませてくれました。雨で濡れた体を温めてくれる巻狩鍋の味はいつもよりも格別に美味しく感じられ、まるで体の隅々にまで染み渡るようでした。最後には直径2.2mの大将鍋を乗せた山車が会場内を練り歩き、無事にまつりを締めくくりました。



1みんなで踊る巻狩踊り 2巻狩太鼓の鼓動が駅構内まで響き渡る 3 4大将鍋を乗せた大迫力の山車 5とても中学生とは思えない腕前の津軽三味線 6アツアツ具だくさんの巻狩鍋 7フォトフレーム作り 8一条乱れぬ出陣踊り 9温かい巻狩鍋に自然とこぼれる笑顔 10なしおレンジャーショーでハイタッチ 11一緒に踊ろうよさこいソーラン 12新作！巻狩焼きそば